

近代の鳥取城

明治維新の後、1873年(明治6)の廃城令では、鳥取城は軍事的な必要性が認められ、建物の多くも陸軍の施設として再利用されました。しかし、国内の治安が安定すると、陸軍の撤退が決定し、1879年(明治12)に不要となった建物のほぼ全てが撤去されました。

城跡はその後、三ノ丸や粉蔵跡が学校用地として転用されたほか、扇御殿跡に宮廷建築の第一人者である片山東熊かたやまとうくまの設計による仁風閣にふうかく(国重要文化財)が建てられました。大正時代になると、市民から要望を受けた旧藩主鳥取池田家によって久松公園が整備されました。設計は、明治神宮外苑(東京都新宿区)の設計者でもある折下吉延おりしもよしのぶでした。



仁風閣



御座所(仁風閣内)

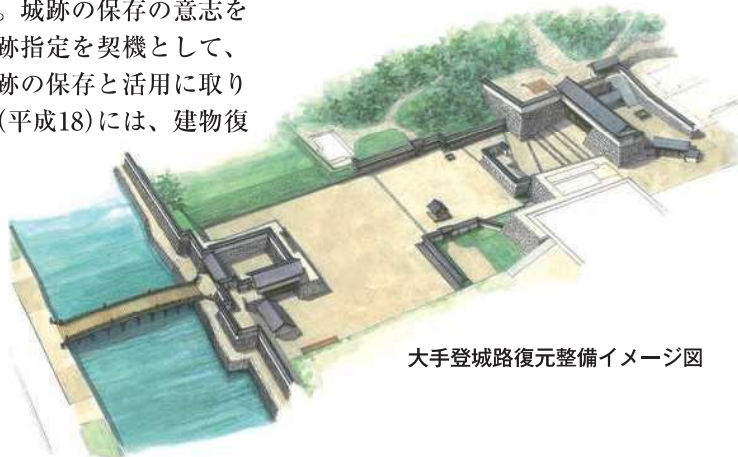
現在そして未来の鳥取城

大正期以降、久松公園として親しまれた鳥取城跡ですが、1943年(昭和18)の鳥取大地震(震度6、死者1210名)によって城跡も大きな被害を受けました。

翌年、旧藩主鳥取池田家は、震災の復興に立ち向かう市民を勇気づけるため、鳥取城跡を鳥取市に寄贈します。城跡の保存の意志を引き継いだ市は、国史跡指定を契機として、石垣の修理を中心に城跡の保存と活用に取り組んでいます。2006年(平成18)には、建物復元を含めた長期的な整備計画を策定し、現在、城の正面玄関にあたる大手登城路の復元整備に取り組んでいます。



崩落した二ノ丸三階櫓台石垣(昭和34年頃)



大手登城路復元整備イメージ図